



Title	GLOCOLブックレット01 はじめに
Author(s)	栗本, 英世
Citation	GLOCOLブックレット. 2009, 1, p. 3-7
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48368
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

はじめに

栗本英世 大阪大学人間科学研究科・教授／GLOCOL・センター長

本書は、2007年12月15日に開催された、文系研究戦略ワーキング「人間の安全保障」第3回ワークショップ「ポストコンフリクトにおける人間の安全保障」の記録である。このワーキングは、大阪大学研究推進室(当時)の決定に基づいて、部局横断的な研究プロジェクトの可能性を模索することを目的に、2005年度から3年間にわたって実施された。研究推進室員として本ワーキングの主査であった本多佑三教授(経済学研究科)と副査の小泉潤二教授(人間科学研究科)からの依頼に基づき、栗本英世が世話役として企画にあたることになった。学内の部局を超えた共同研究プロジェクトの醸成を図るために自由な討議の場を設定するというワーキングの目的に鑑み、ワークショップの広報の対象は大阪大学の教員に限定した。

第1回ワークショップは、2006年2月27日に、千里ライフサイエンスビルで開催された。その企画書に書かれた趣旨は以下のとおりである。この趣旨は、3年間にわたって継続した本ワーキングの基調となった。

「人間の安全保障」は、過去10年ほどのあいだに、国際社会や市民社会において重要な地位を占めるに至った。2000年の国連ミレニアム会議で事務総長が提唱した、「欠乏からの自由」と「恐怖からの自由」の達成は、人類全体に課せられた課題であるといえる。日本政府とJICAも、人間の安全保障を開発援助の中心概念として位置づけ、積極的に取り組んでいる。また、日本の大学でも、この名前を冠した多数の教育研究プロジェクトが生まれつつある。

人間の安全保障は、人文・社会・自然科学の様々な研究分野が関連する課題であり、領域横断的、あるいはひとつの総合大学にとっては部局横断的なプロジェクトのテーマにふさわしい。また、この概念は、きわめて包括的であり、かつ研究と実践の両方に深くかかわる点も、学際的・総合的なプロジェクトに適し

ているといえる。

大阪大学では、個別の教員やそれぞれの部局のレベルで、人間の安全保障に関する取り組みがおこなわれてきたが、横断的な連携は今後の課題として残されている。この問題に関心を抱く、さまざまな部局の教員が集まり、情報交換だけでなく、学問的に相互に啓発できるようなフォーラムを創ること、これが本ワークショップの目的である。連続的にワークショップを開催することにより、あらたな先端的研究が生成する契機となることを期待している。

さて、第1回ワークショップの第1部では、日本における人間の安全保障研究の分野で先駆的な業績をあげてきた二つの研究機関である中部大学人間安全保障研究センターと東海大学平和戦略国際研究所のそれぞれから中心的研究者、峯陽一教授と旦祐介教授を招へいし、研究プロジェクトについて発表していただいたあと、大阪大学側の参加者との討論を行った。第2部では、人間の安全保障に関する研究に従事してきた阪大の教員2名、黒澤満教授(国際公共政策研究科)と池田光穂教授(CSCD)による報告ののち、総合討論の時間を設けて、今後のワークショップのプログラムと、共同研究の可能性について議論した。経済学研究科、文学研究科、法学研究科、国際公共政策研究科、人間科学研究科など、学内各部局の研究者による討論はきわめて有益なものとなった。ワークショップのプログラムは以下のとおりである。

文系研究戦略ワーキング「人間の安全保障」第1回ワークショップ

日時:2006年2月27日(月)13:30-17:30

場所:千里中央 千里ライフサイエンスセンター6階・会議室

【プログラム】

第1部 招聘講師の講演(13:30-15:30)

司会:栗本英世(大阪大学大学院人間科学研究科・教授)

(1) 峯 陽一(中部大学国際関係学部/人間安全保障研究センター・教授)

「人間の安全保障とリスク」

(2) 旦 祐介(東海大学大学院政治学研究科/平和戦略国際研究所・教授)

「人間の安全保障の課題と展望」

(3) 阪大教員によるコメント

第2部 阪大教員による報告と総合討論(15:50-17:30)

司会:小泉潤二(大阪大学大学院人間科学研究科・研究科長)

(1) 黒澤 満(大阪大学大学院国際公共政策研究科・教授)

「国際公共政策と人間の安全保障」

(2) 池田光穂(大阪大学コミュニケーション・デザインセンター・教授)

「グアテマラ先住民の行動と主張」

『人間の安全保障』の具体的な理解の方法について」

(3) 総合討論

第2年度には、2006年11月4日に第2回のワークショップを開催した。このワークショップでは、2名の講師による報告と、コメント・総合討論を行った。栗栖薫子助教授(国際公共政策研究科)は、国際政治学の立場から「人間の安全保障」という概念自体の成立と展開を論じ、招へい講師の小池誠一氏(JICA調査役)は、JICAにおける人間の安全保障プロジェクトの現実的問題と今後の展望について報告した。総合討論は、国際協力や開発援助をめぐる、研究者と実務家とのあいだの対話と連携の可能性、および大阪大学文系研究戦略ワーキングの今後のプログラム構築という、二つのトピックを柱として行われた。

文系研究戦略ワーキング「人間の安全保障」第2回ワークショップ

日時:2006年11月4日(土)13:30-17:20

場所:千里中央 千里ライフサイエンスセンター9階・901会議室

【プログラム】

第1部 講師の講演(13:30-15:30)

司会:栗本英世(大阪大学大学院人間科学研究科・教授)

(1) 栗栖薫子(大阪大学大学院国際公共政策研究科・助教授)

「人間の安全保障をめぐる規範形成と展開について」

(2) 小池誠一(国際協力機構(JICA)企画・調整部人間の安全保障担当調査役)

「JICAにおける人間の安全保障の実践と今後の課題」

第2部 参加者によるコメントと総合討論(15:50-17:20)

司会:小泉潤二(大阪大学大学院人間科学研究科・教授)

コメント1:峯 陽一(大阪大学大学院人間科学研究科・助教授)

コメント2:三牧純子(JICA国際協力総合研修所)

総合討論

情報交換会(18:00-)

於 千里クラブ(千里ライフサイエンスセンター内)

最終年度にあたる2007年度には、前2回のワークショップの成果を踏まえ、「ポストコンフリクト」(紛争終結後)の社会を対象をしぼり、実践的な観点を強調しつつ、第3回のワークショップを組織した。プログラムは以下のとおりである。

文系研究戦略ワーキング「人間の安全保障」第3回ワークショップ

日時:2007年12月15日(土)13:00~17:00

場所:大阪大学総合学術博物館 待兼山修学館3階セミナー室

【プログラム】

問題提起:栗本英世(大阪大学人間科学研究科・教授/GLOCOL・センター長)

報告1:石井正子(大阪大学GLOCOL・特任准教授)

「フィリピン南部の紛争と人権侵害:保障されない個人の安全」

報告2:内海成治(大阪大学人間科学研究科・教授)

「ポストコンフリクト教育支援のためのディスコース」

報告3:下田道敬(国際協力機構(JICA)・国際協力専門員)

「最近のアフリカの地方分権化改革と日本の支援」

総合討論:

司会:小泉潤二(大阪大学理事・副学長)

本書は、この第3回のワークショップの成果の報告書である。問題提起と三つの報告だけでなく、個別の報告に対する質疑応答と、総合討論のすべてを収録した。

大阪大学研究推進室のイニシアティブのもとに開始された文系研究戦略ワーキング「人間の安全保障」は、2007年度をもってその使命を終え、終了した。このワーキングは、発足当初から、小泉潤二教授を責任者とする文理融合研究戦略ワーキングと密接な連携関係にあった。2007年度からは、この年度のはじめに発足した大阪大学コラボレーションセンター(GLOCOL)が、両ワーキングのマネージメントを担当するとともに、その継続に責任を負うことになった。2007年以降、GLOCOLは、学内の様々な部局との連携のもと、人間の安全保障やサステナビリティ(持続可能性)といった概念を柱とする教育研究プログラムの開発と

実施に従事している。

本ブックレットは、こうしたGLOCOLの試みのひとつの出発点となったワークショップの記録であるとともに、今後、教育・研究・実践の三領域にまたがるプログラムを展開していくうえでの、重要な示唆やヒントが含まれている。その意味で、たんなる記録以上の価値があると考えている。

文系研究戦略ワーキングの推進と運営にあたっては、多くの方々のお世話になった。以下にお名前を記して、謝意を表したい(肩書きは当時のもの)。本多佑三教授(経済学研究科、ワーキング主査)、二神孝一教授(経済学研究科、ワーキング主査)、小泉潤二教授(人間科学研究科、ワーキング副査)、佐藤正子係長(研究推進部研究推進課研究推進企画係)、三木まり事務補佐員(人間科学研究科研究推進室)、木村好子特任事務職員(グローバルCOE事務局)、三田 貴特任研究員(GLOCOL)、福田州平特任研究員(GLOCOL)。最後に、本ブックレットの編集作業を担当してくださったのは小山茂樹氏(ブックポケット)である。プロとしての仕事ぶりにお礼申しあげる。